

各関係機関団体の長
各病害虫防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病害虫防除所長

平成18年度病害虫発生予報第6号について

このことについて、病害虫発生予報第6号を発表したので送付します。

ハスモンヨトウの発生に注意！！

台風10号の通過後、フェロモントラップでのハスモンヨトウの誘殺虫数が増加し、現地では大豆の白変葉が見られるほ場もあります。周辺の野菜や花き類のほ場でも発生状況に注意し、適期防除に努めましょう。



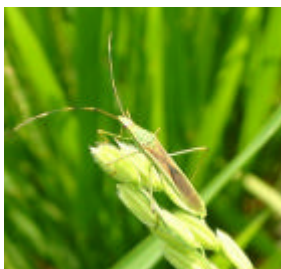
若齢幼虫
(集団で食害している様子)



老齢幼虫
(背面の2つの黒紋が特徴)

斑点米カメムシを適期に防除しましょう！！

斑点米カメムシは出穂直前から水田内へ侵入吸汁加害し、斑点米を発生させます。
周辺雑草の草刈りは出穂前に早めに行いしょう。
防除適期は穂揃期とその7～10日後です。



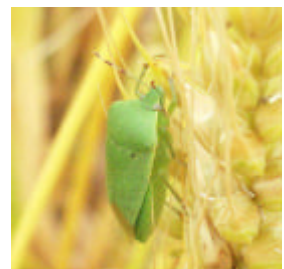
クモヘリカメムシ



ホソハリカメムシ



シラホシカメムシ



ミナミアオカメムシ

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。
 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
 気温は高いでしょう。降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。
 週別の気温は、1週目は高く、2週目は平年並か高く、3～4週目は高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	30	50
降水量	40	40	20
日照時間	20	40	40

(福岡管区気象台 18年8月25日発表抜粋)

< 高温に関する気象情報 >

梅雨明け後、太平洋高気圧に覆われて、晴れて気温が高い日が多くなっています。
 少なくとも今後2週間程度は高気圧に覆われやすく、気温が高い状態が続く見込みです。
 (福岡管区気象台 18年8月28日発表抜粋)

予報第6号

向こう1か月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生現況	発生予報	
		平年比	平年比	前年比
普通期水稻	紋枯病	やや多	やや多	並
	トビイロウンカ	やや少	並	やや少
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多	並
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	並
	吸実性カメムシ類	やや多	やや多	やや多
カンキツ	黒点病	多	多	多
	ミカンハダニ	並	並	並
カキ	炭疽病	やや少	やや少	並
	フジコナカイガラムシ	並	並	やや少
	ハマキムシ類	並	並	並
果樹共通	カメムシ類	多	多	多
茶	炭疽病 もち病 輪斑病 カンザワハダニ チャノホソガ チャノコカクモンハマキ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	やや多 少 少 多 少 少 並 並	並 並 やや少 やや多 少 少 並 並	やや多 並 並 多 少 少 やや多 やや少
アスパラガス	斑点病 アザミウマ類	並 やや多	並 多	多 やや多

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 紋枯病

(1) 予報の内容

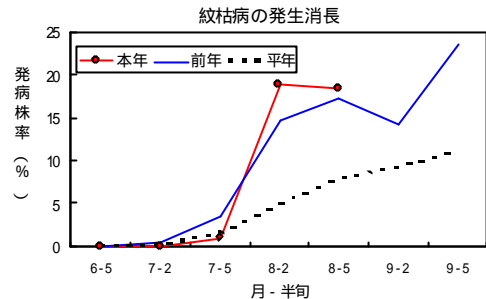
発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果（ + ）

発病株率 18.3%（平年 7.9%、前年 17.4%）
県南地域での発生が多い。

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない。（ + ）



(3) 防除上の注意

ア 出穂期以降も、病斑の上位進展が認められる場合は、穂揃期頃までに補正防除を行う。

イ 防除に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散（ドリフト）防止の徹底を図る。（以下の病害虫についても同じ）

2 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

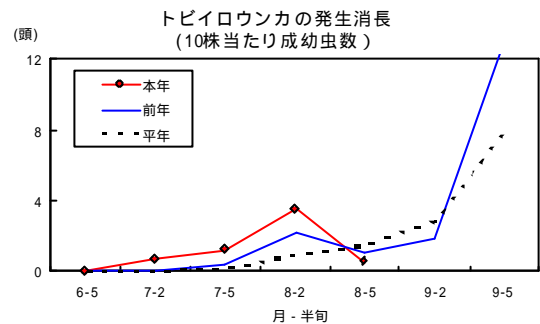
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果（ - ）

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.53頭（平年 1.47頭、前年 1.03頭）、発生ほ場率 41.4%（平年 33.4%、前年 38.3%）

8月上中旬に防除が実施されたほ場では発生密度が低下している。

イ 8月の平均気温が平年より1～2 高く推移し、向こう1か月間の気温も平年より高く、トビイロウンカの増殖好適条件が続くと予想される。（ + ）



(3) 防除上の注意

ア トビイロウンカは局部的に急激に増殖し坪枯れを起こすため、防除対策に怠りのないようそれぞれのほ場の出来るだけ広い範囲を見て回り、発生状況を必ず確認する。

イ 出穂後は、薬剤が株元へ到達しにくくなるため、トビイロウンカの生息域である **水稲の株元に確実に薬剤が届くよう散布**する。

盆前後に防除を実施していないところや、中晩生品種で基幹防除を出穂期前後に1回しか予定していないところは、特に注意する。

ウ 薬剤散布後は、必ず効果を確認する。効果が認められない場合は追加防除を行う。

なお、追加防除を行う際、収穫期が近い場合は防除薬剤の使用時期（収穫前日数）を確認する。収穫期が迫り、薬剤散布出来ない場合には、収穫適期の範囲内で早めに収穫する。

エ 次回の定期予察調査（9月2半旬）後に発生状況を発表する予定なので、今後の情報も参考にする。

昨年は、発生密度が8月2半旬時点で要防除水準を超え、8月5半旬調査では減少したものの、その後の高温で急激に増殖し、県下全域で坪枯れが発生した。今年の8月5半旬の発生密度は、前回調査時（8月2半旬）より減少しているが、8月の平均気温が平年より1～2 高く推移し、**気温は今後も高いことが予想されており、トビイロウンカの増殖好適条件が続く**と思われる。9月下旬までは油断せず、発生状況に注意を怠らない。

3 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(片振り20回すくい取り成幼虫数)(±)

クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類

本田 0.5頭(平年 1.0頭、前年 1.7頭)

畦畔 1.8頭(平年 3.2頭、前年 4.7頭)

雑草地 14.0頭(平年13.5頭、前年 5.7頭)

カスミカメムシ類

本田 0.6頭(平年 0.7頭、前年 2.4頭)

畦畔 3.2頭(平年 7.4頭、前年 7.7頭)

雑草地 22.4頭(平年31.6頭、前年40.9頭)

地域により発生状況に差が見られるが、雑草地での発生が多い地域では、畦畔や本田内の発生も多い傾向が見られる。

イ 8月1～5半旬の県内5地点の予察灯における誘殺虫数は、平年、前年より多い。(+)

アカスジカスミカメ 843頭(平年 508.8頭、前年 491頭)

アオクサカメムシ 103頭(前年 4頭)

ミナミアオカメムシ 11頭(前年 1頭)

なお、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなどは予察灯へほとんど誘殺されない。

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、カメムシ類の発生好適条件続くと予想される。(+)

(3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田の雑草は、カメムシ類の発生源となるので、出穂前に早めに草刈りする。

イ 防除適期は、穂揃期及びその7～10日後である。

ウ とう精により除かれない直径1ミリ以上の吸汁痕のある斑点米は、農産物検査規格上「着色粒」に分類される。1等米から2等米に格付けが下がる着色粒混入率は、目安として玄米1000粒中着色粒が2粒以上である。斑点米は、カメムシ類の密度が極めて低い場合でも発生し、経済的損失が大きいため、防除を徹底する。

エ ほ場内で、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなどの大型の斑点米カメムシ類が散見されたら、防除を行う。

福岡県における被害許容水準を斑点米混入率0.1%とした場合の要防除水準は、20回すくい取り調査で、クモヘリカメムシとホソハリカメムシの合計虫数が2～3頭。

オ 防除は、水田周辺の畦畔など、カメムシ類の発生源も含めて行うと効果が高い。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(たたき落とし調査)

(-)

25株当たり幼虫数 5.7頭(平年 16.7頭、前年

48.9頭)

発生ほ場率 73.7%(平年 53.1%、前年 63.2%)

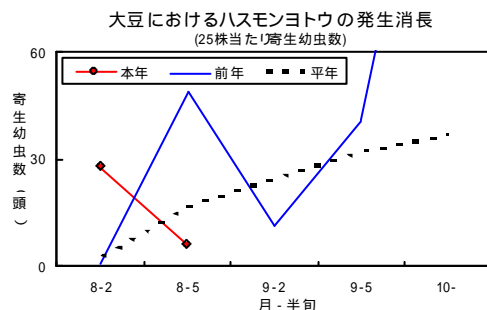
イ 8月1半旬～5半旬のフェロモントラップによる誘殺虫数(±)

筑紫野市 351頭(平年 467.2頭、前年 312頭)

筑後市 223頭(平年 270.0頭、前年 297頭)

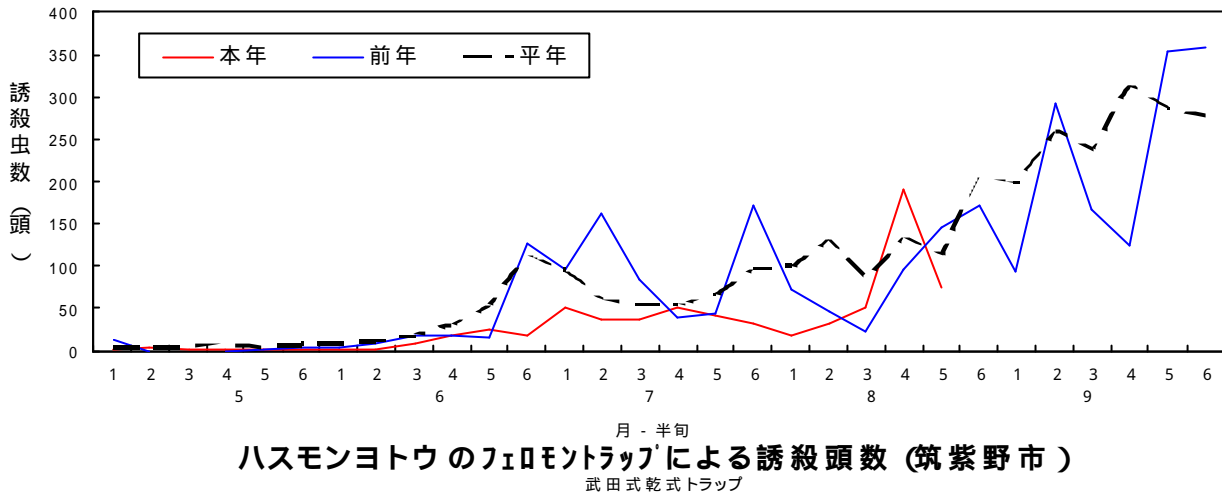
行橋市 1685頭(平年 1430.7頭、前年 264頭)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない。(+)



(3) 防除上の注意

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している大豆の白変葉は直ちに除去する。
- イ 薬剤散布は、効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃となるが、前後する場合があります。必ずほ場での発生状況を確認し、白変葉が発生し始めたら早急に防除を行う。
- エ 近隣にフェロモントラップが設置されていない場合は、病害虫防除所のホームページにフェロモントラップの誘殺状況（筑紫野市、筑後市、行橋市）を掲載するので、参考にして防除時期を決める。



2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査（たたき落とし調査）結果（+）
主要3種カメムシ類（アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ）の25株当たり成幼虫数 0.8頭（平年 0.2頭、前年 0頭）
発生ほ場率 26.3%（平年10.8%、前年：0%）
- イ 8月1半旬～8月5半旬の県内5地点の予察灯における誘殺虫数（+）
アオクサカメムシ 103頭（前年 4頭）
ミナミアオカメムシ 11頭（前年 1頭）
- ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高いと予想される。（+）

(3) 防除上の注意

- ア 開花期を迎えているほ場では、カメムシ類が集中する恐れがあるので、ほ場を見回り、飛来を確認したら防除を行う。
- イ 若莢期から子実肥大期の加害が多いので、この時期の防除を徹底する。なお、薬剤は着莢部に十分付着するように散布する。
- ウ 吸実性カメムシ類の生息密度は、ほ場の周辺部に高い傾向があるため、周辺部への薬剤散布は丁寧に行う。その際、周辺への飛散（ドリフト）には十分注意を払う。
- エ ハスモンヨトウに対して若莢期から子実肥大期に薬剤を散布する場合は、カメムシ類にも効果のある薬剤を選択する。
- オ カメムシ類は広範囲に移動するので、薬剤散布は出来るだけ広い地域を一斉に行うと効果が高くなる。

【普通作：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
普通期水稻 穂いもち	少	少	並	<p>【発生状況および防除対策】</p> <p>8月5半旬調査の結果、発病が見られたのは、中山間地の早植のほ場のみで、発病穂率は0.01%（平年0.3%、前年0.01%）と低かった。予防防除が効果が高いため、常発地や葉いもちの発生が多かったほ場では、出穂期前後の防除を徹底する。</p>
コブノメイガ	並	並	やや多	<p>【発生状況および防除対策】</p> <p>8月5半旬調査の結果、食害株率は24.2%（平年19.0%、前年7.0%）、30㎡当り払い出し成虫数は5.5頭（平年10.3頭、前年3.2頭）であった。食害葉率は1.9%（平年1.3%、前年0.4%）と平年並で要防除水準（食害葉率20%）を超えるほ場はなかった。出穂期前後の食害が問題となるが、被害発生後では手遅れとなるため、遅くとも穂揃期頃までに防除を行う。</p>

【果樹】

1 カンキツ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

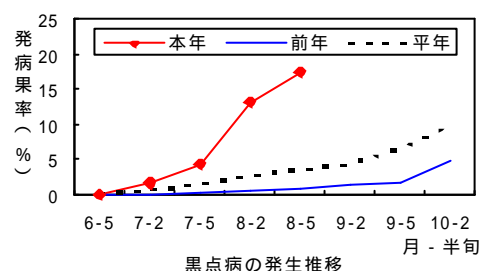
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果（+）

発病果率 17.5%（平年 3.6%、前年 1.1%）

発生ほ場率 81.3%（平年 42.4%、前年47.1%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない。（-）



(3) 防除上の注意

ア 枯れ枝は感染源となるので除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量 250 mmを防除間隔の目安に降雨の合間をぬって防除を行う。

ウ 防除に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散（ドリフト）防止の徹底を図る。極早生種は収穫期に入るので、特に薬剤の選定に当たっては、使用時期（収穫前日数）に注意する。（以下の病害虫についても同じ）

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(±)

寄生葉率 19.8% (平年 15.4%、前年 22.5%)

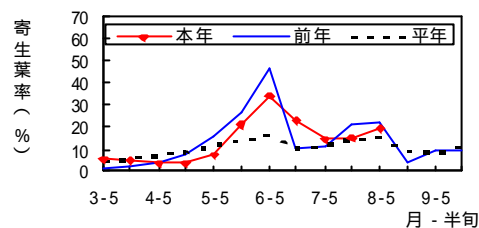
発生ほ場率 76.5% (平年 64.3%、前年 82.4%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない。(+))

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



ミカンハダニの発生推移

3 カキ炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(-)

発病枝率 0.2% (平年 1.0%、前年 0%)

発生ほ場率 17.6% (平年 27.3%、前年 0%)

発病果率 0.2% (平年 0.7%、前年 0.2%)

発生ほ場率 17.6% (平年 33.5%、前年 12.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない。(-)

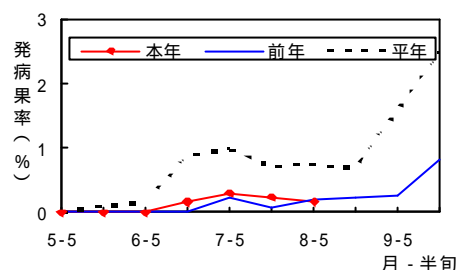
(3) 防除上の注意

ア 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので除去する。

イ 降雨により感染が拡大するので、発病の多い園では防除を徹底する。また、発病の少ない園でも台風等の強風雨が予想される場合は、事前に必ず防除を行う。

ウ 樹冠内部の徒長枝に発病しやすいので、樹冠内部にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

エ 防除に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散(ドリフト)防止の徹底を図る。早生種は収穫期に入るので、特に薬剤の選定に当たっては、使用時期(収穫前日数)に注意する。(以下の病害虫についても同じ)



炭疽病の発生推移

4 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(±)

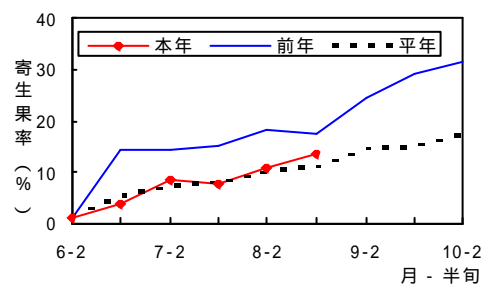
寄生果率 13.6% (平年 11.0%、前年 17.3%)

発生ほ場率 82.4% (平年 73.5%、前年 94.1%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない。(+))

(3) 防除上の注意

防除を行う場合には、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などに薬液がかかるよう丁寧に散布する。



フジコナカイガラムシの発生推移

5 カキのハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

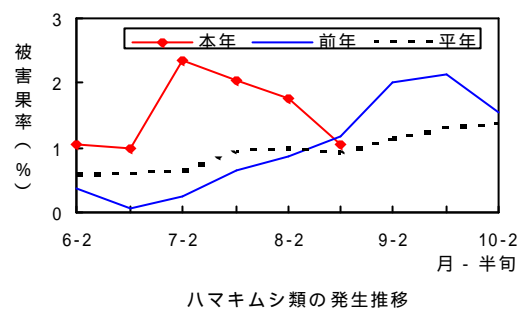
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(+)

被害果率 1.1% (平年 0.9%、前年 1.2%)

発生ほ場率58.8% (平年39.4%、前年58.8%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない。(+)



(3) 防除上の注意

本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面等に多く寄生しているので、散布ムラのないように防除する。

6 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬の県下32か所におけるヒノキのビ - ティング調査では、寄生虫数は14.9頭と減少する一方で、ヒノキ球果の口針鞘数は、19.1本と増加し、カメムシ類がヒノキから離脱する目安とされる25本に近づいている。

イ 8月下旬頃からカメムシの果樹園への飛来が増加しつつある。県南地域(筑後農林管内)ではいづれの調査地点でも口針鞘数が25本を超えており、果樹園への飛来が増加している。

ウ チャバネアオカメムシの8月4~5半旬の10日間の予察灯6か所平均誘殺数は、1,663頭(平年 588頭)で、過去10か年で最も多い。

8月28日付けで注意報第6号を発表した。

カメムシの防除がなされていないカキ園等で加害による落果が発生している。

防除に当たっては、薬剤によって残効期間が異なるので園内外をこまめに見回り、前回防除から残効期間が経過している園では、飛来を認めたら直ちに防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ナシ ハダニ類	並	並	多	多発すると防除が困難になるので初期防除を徹底する。
ブドウ べと病	多	多	多	秋期に低温で雨が多い場合は発生に注意する。
カキ うどんこ病	少	少	並	秋期は発生が増加するので発生状況に注意し、防除を行う場合には、葉裏にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果 (+)

発病葉数 1.2葉(平年 0.8葉、前年 1.1葉)

発生ほ場率 32%(前年 23.1%)

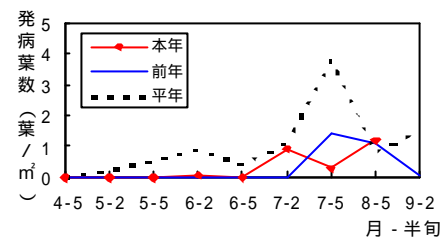
イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(±)。

(3) 防除上の注意

ア 整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに薬剤防除を行う。特に最終摘採後の新芽(秋芽など)の防除は、翌年の一番茶の品質・収量に大きく影響するため、防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散するので、防除は降雨前が効果が高い。

ウ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



炭疽病の発生推移

2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果 (±)

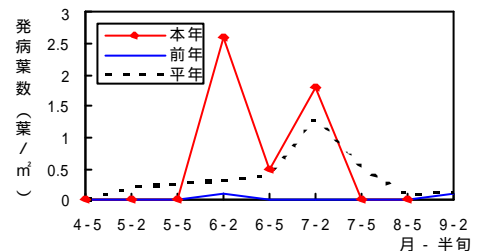
発病葉数 0葉(平年 0.09葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(-)。

(3) 防除上の注意

降雨が多いと感染し発病しやすくなるため、発生のおそれのある園では、萌芽期から1葉期までに薬剤防除を行う。



もち病の発生推移

3 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果 (-)

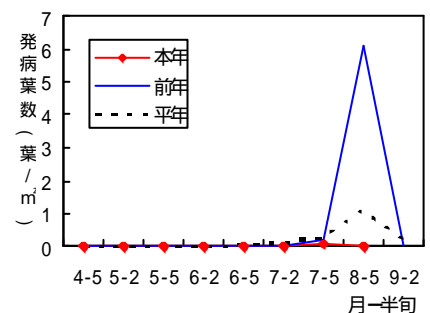
発病葉数 0葉(平年 1.13葉、前年 6.1葉)

発生ほ場率 0%(前年 61.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(±)。

(3) 防除上の注意

整枝などによる葉や茎の傷口から降雨により病原菌が侵入感染するため、夕立ちなどの降雨に注意する。また、台風等の強い風雨の後では、葉や茎の傷口の増加によって感染が急速に拡大する場合があるので、降雨後速やかに(翌日までに)薬剤防除を実施する。



輪斑病の発生推移

4 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果 (+)

寄生葉率 3.8% (平年 1.2%、前年 1.1%)

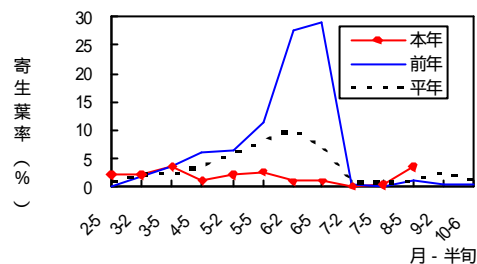
50葉当たり虫数4.9頭 (平年 1.9頭、前年 3.7頭)

発生ほ場率 52% (前年 26.9%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(+).

(3) 防除上の注意

発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。



カンザワハダニの発生推移

5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(-)

被害葉数 1.0葉 (平年 2.4葉、前年 0葉)

発生ほ場率 36% (前年 0%)

イ 8月1半旬から8月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(-)

調査地点：黒木町 9頭 (平年 295頭、前年 173頭)

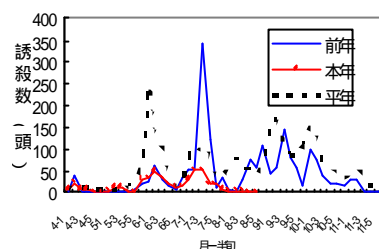
頭)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(±).

(3) 防除上の注意

ア 第4世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が散見されたら直ちに防除を行う。



フェロモントラップによるチャノホソガ誘殺数(黒木町)

6 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(-)

被害葉数 0.4葉 (平年 0.7葉、前年 1.1葉)

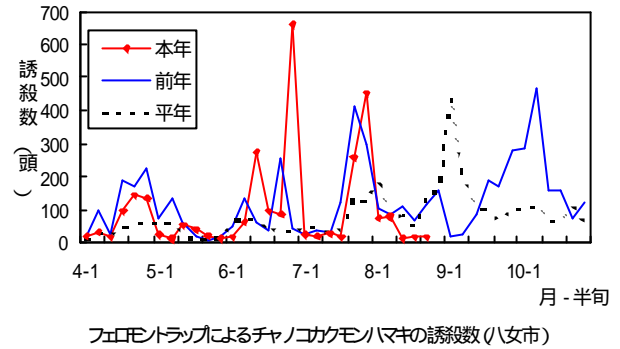
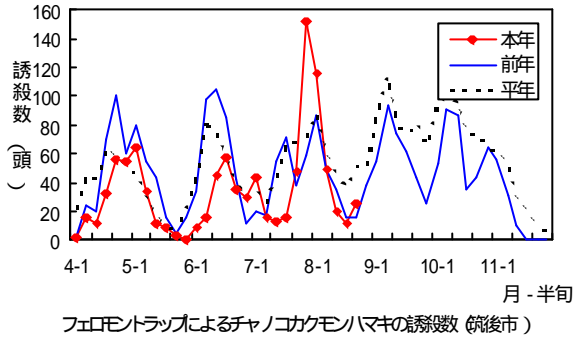
発生ほ場率 24% (前年 30.8%)

イ 8月1半旬から8月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(-)

調査地点：筑後市 221頭 (平年 279頭、前年 202頭)

八女市 200頭 (平年 528頭、前年 490頭)

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上旬と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

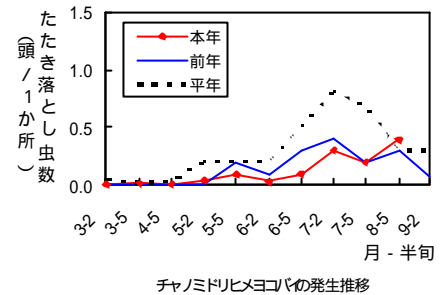
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(±)

たたき落とし虫数0.4頭(平年 0.3頭、前年 0.3頭)

発生ほ場率 52%(前年 23.1%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は平年並か少ない(+)



(3) 防除上の注意

たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上確認される場合は防除を行う。

8 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

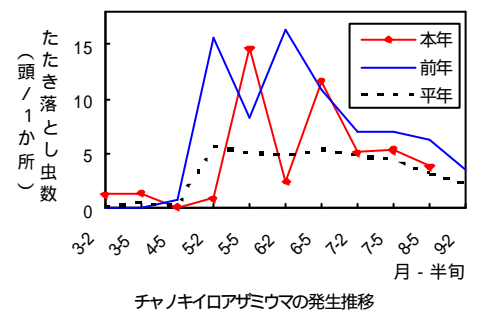
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(±)

たたき落とし虫数3.9頭(平年 3.2頭、前年 6.2頭)

発生ほ場率 92%(前年 100%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並か少ない(±)。



(3) 防除上の注意

たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上確認される場合は防除を行う。

【野菜】

1 アスパラガスの斑点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

8月5半旬調査結果(+))

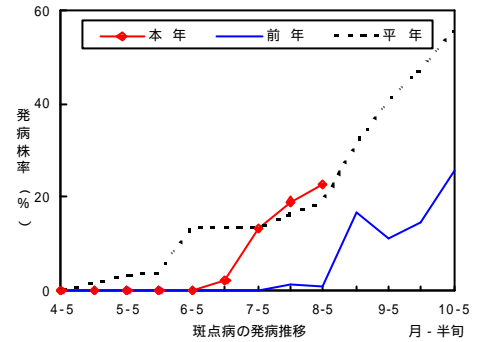
発病株率 22.8% (平年 19.1%、前年 0.6%)

(3) 防除上の注意

ア 茎葉が過繁茂状態になると、発病しやすくなるため、余分な茎葉は刈りとる。

イ 病徴は主に擬葉に発生する。発病ははじめの小型病斑を見逃さず、初期防除に努める。

ウ 薬剤の散布ムラができないように、丁寧に散布する。



2 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より多く、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査結果(±)

寄生株率 70.0% (平年 36.3%、前年 58.9%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より

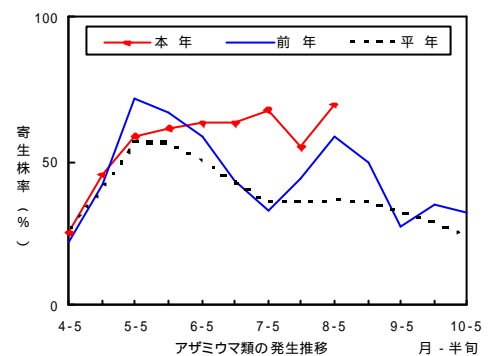
高く、降水量は平年並か少ない。(+))

(3) 防除上の注意

ア 成茎の擬葉を手で払い、落下した虫数で発生状況を確認する。白い紙などで受けると見やすい。成茎で多発生している場合は、若茎にも寄生がみられるようになるので注意する。

イ 多発生後は防除が困難となるので、初期防除を徹底する。

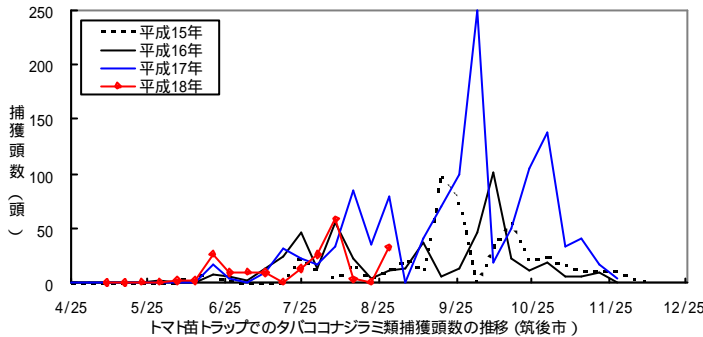
ウ 雑草は害虫の発生源になるため、圃場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜のその他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ネギ ヨトウ	やや多	並	並	防虫ネットを設置すると効果が高い。
アスパラガス ハダニ類	少	やや少	やや少	早期発見に努め、発生初期から防除する。
アブラムシ類	やや少	並	やや多	
鱗翅目	並	並	並	
野菜共通 ハスモンヨトウ	やや少	並	並	[大豆のハスモンヨトウ]のグラフを参照する。

オオタバコガ	やや少	並	並	<p>9月下旬から増加するので、今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。</p> <p>【予報の根拠】 野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数の推移は左図のとおり。</p> <p>今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。</p> <p>【防除上の注意事項】 トマト黄化葉巻病の発病を抑えるため、0.4mm目合い以下の通気性の良い防虫ネットを設置し、コナジラミ類の侵入を防ぐ。</p> <p>育苗期～定植時の粒剤処理と定期防除を行い、発生を抑制する。</p>
コナジラミ類	並	並	並	



【イチゴ炭疽病の発生に注意！！】

本年は梅雨前線が停滞し、7月は降水量が平年より多く推移した。また、梅雨明け後は一転して好天が続き、気温が高く30 を超す日も多かった。このため、イチゴの炭疽病の感染、発病が促され、各地で炭疽病による苗の枯死がみられている。苗不足となるおそれもあるので、定植前の防除、管理を徹底する。

- (1) 一旦感染すると防除が困難であるので、防除は予防的に行う。特に降雨前後は防除を徹底する。
- (2) 発病株はすみやかに除去し、焼却するかビニル袋に完全に包み込み、病原菌の周辺への飛散を防止する。
- (3) 窒素肥料の過用を避ける。
- (4) 圃場は、排水を図り多湿にならないようにする。
- (5) 定植後に発病した場合は、残渣を残さずに周囲の土ごと抜き取る。

【イチゴのハダニ類】

- (1) 近年は定植直後から寄生が多い。育苗期の防除を徹底し本圃に持ち込まない。
- (2) 定植直後の防除を徹底する。この時期は葉数が少ないので薬液が葉裏にもかかり易く、防除効果を上げやすい。
- (3) 多発生後は防除が困難であるので早期発見、早期防除に努める。
- (4) 下葉の被害葉は、取り除き適正に処分する。
- (5) イチゴ以外の植物にも寄生するので、圃場周辺の除草を行う。
- (6) 薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。

農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）の販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数の使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場毎、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpjn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpjn.ne.jp